

男勝りのレディの結婚

—『北と南』にみる女性の生き方の変容と
ドメスティック・イデオロギーからの解放

矢 嶋 瑠 莉

序論

ヴィクトリア朝の上流および中産階級の女性達は「家庭の天使」となり、自分の意志は持たず、常に男性の意見に従って行動し、男性の経済力に頼って暮らす——というのが、社会で容認された認識であり広く普及された考えだった。「家庭の天使」という語句がもてはやされた背景にはドメスティック・イデオロギーが関係し、女性達には良き妻・良き母になること以外の生き方は想定されておらず、実際にそれ以外の選択肢はほとんど与えられていなかったのである。

だが現状は、男女比のアンバランスや男性の晩婚化等が原因とされる、未婚女性の増加が「余った女」と呼ばれる社会問題となっていた。結婚できないという事態は、特に中産階級のさほど裕福ではない家庭の娘たちにとって、金銭面と体裁の両方が絡む深刻な問題であった。というのも彼女達は、結婚前は父親の収入に頼り、結婚後は夫の収入に頼ることでレディとしての生活を維持しており、もし自分で収入を得ようとするならば、品位を落とさずに就ける職業はガヴァネスに限られていたからである。また1860年代からは、「余った女」の問題の打開策の一つとして、ガヴァネスの植民地への移住計画が始まるが、これはその問題の本質的な解決策にはなっていない。

だが果たして、当時の未婚女性は本当に結婚したくても男性の数が足りずに“余った”者達であり、また家父長に養われるか、ガヴァネスとなる

か、海外に移住するかのいずれかを選択して生きるしかなかったのだろうか。結論から言うと、そうではない。彼女達の中には、“自ら”独身であることを選択する者や、男性達に引けをとらずに社会で活躍する者もいたからである。例えば、上流階級出身のフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale) は、良妻賢母として生きることや、受け身で退屈な有閑生活に魅力を感じずに、生涯独身を通した。彼女はクリミア戦争 (Crimean War) での従軍看護の功績を認められ、後年は看護学校の設立に尽力した。このように、既存の概念を打ち破って家庭の外に女性の領域を広げ、男女同権と女性の社会進出を求める女性達は「男勝りの女」と呼ばれた。彼女達はいわば「新しい女」の前身であった。

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の長編『北と南』 (*North and South*, 1854) は、まさにこうしたヴィクトリア朝の女性の生き方の変革期に書かれた作品である。主人公のマーガレット・ヘイル (Margaret Hale) は中産階級の年頃のレディであるが、恋愛や結婚にあまり興味がなく、贅沢な生活にも関心がない。自立心に富み、男性と対等に論議を交わす彼女は、中産階級の理想の「家庭の天使」というよりは男勝りな性格の女性である。強い正義感と倫理観を持つ彼女は、そのためにしばしば社会が求める“レディらしさ”の規範から外れた行動を取り、ジョン・ソーントン (John Thornton) とその母親らに軽率な女のレッテルを貼られそうになるが、誤解が解けて最終的にソーントンと結ばれる。このように一見、中産階級のイデオロギーに反発するかのような性質の女性である彼女が、「余った女」とはならず結婚できたのはなぜか。¹ それを読み解く鍵は、ソーントンがマーガレットに抱いた“queen” (89) という印象にある。

女性達が結婚して「家庭の天使」として生きることが難しくなってきた19世紀中葉の時代に、ギヤスケルは『北と南』を通して何を伝えようとしたのだろうか。本稿では、『北と南』のマーガレットとソーントンの結婚に表象される“男勝り”のレディの結婚について、社会のイデオロギーと対する「余った女」の問題や、当時の婚姻事情と女性達の生き方の変容を踏

まえて考察する。

I 女性の生き方の変容

はじめに、ヴィクトリア朝の女性の生き方と婚姻事情の変容について、「家庭の天使」、「余った女」、当時の婚姻事情、「男勝りの女」の四つの項目から説明する。

「家庭の天使」とは、当時人気を博したコヴェントリー・パトモア (Coventry Patmore) の長編詩 *The Angel in the House* (1854–62) がその名の由来である。これについて Nina Auerbach は、当時の多くの人々はそのタイトル (“Angel in the House”) を “a convenient short-hand for the selfless paragon all women were exhorted to be, enveloped in family life and seeking no identity beyond the roles of daughter, wife, and mother” (67–69) と捉え、「作品の中身よりもタイトルにより多くの反響」(66) があったことを指摘する。労働者階級を除いて、当時の女性の領域は家庭の中にある (“in the House”) と考えられ、結婚して夫に尽くし子どもたちの良き母となることが女性達に期待された役割であった。また、ヴィクトリア女王 (Queen Victoria) が「家庭の天使」を自らのイメージ像に掲げていたことも、それが理想の女性像の象徴として社会に広く流布されるきっかけとなった。

一方、イギリスでは 1840 年代から未婚女性の増加現象が起き、「余った女」と呼ばれる社会問題となっていた。「余った女」は “redundant woman” や “surplus woman” と表記されるように、単なる独身女性 (unmarried) や行き遅れた女性 (spinster) とは違い、女性の数が過剰となり男女比のアンバランスが生じたために、結婚できずに生涯独身となった女性達を指す。『北と南』が発表される三年前の 1851 年の国勢調査では、「一八五一年に十五歳以上の独身女性は二七六万五〇〇〇人、[...] うち、十五歳以上の独身女性数と独身男性数の差——すなわち、配偶者を持たない、あるいは持つ見込みのない女性数——は七万二五〇〇人」(川本 14) という結果が示されている。² 上流および中産階級の未婚女性は父親に扶養され、父親の

死後は兄弟が代わりにその女性を養うことが普通であった。だが、J. A. Banks が “The middle- and upper-class spinster without money of her own was in an unenviable position” (34) と述べるように、働くことのできない彼女達を養うことは家計の負担であり、経済力に余裕のない下層中産階級の家庭の女性達は肩身の狭い思いをしながら暮らすこととなった。父親や兄弟の経済力を当てにせず、女性が一人で身を立てる方法はガヴァネスになることであった。だが苦勞してガヴァネスの資格を取っても、それほど高くはない賃金で雇われるのが普通であり、働いた経験のないレディにとっては何かと気苦勞の多い仕事であったことは間違いない。³ その上、多くの未婚女性がガヴァネスの職を求めるようになると、需要を供給が上回って職にあぶれる者も出始める。⁴ またシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の友人のメアリ・テイラー (Mary Taylor) は、⁵ イギリス国内での未婚女性の肩身の狭さに耐えかねて、ニュージーランドに移住しているが (Auerbach 111)、実際に W・R・グレッグ (W. R. Greg) らが「余った女」の植民地への移住計画を提唱しており、彼の案は1862年の『ナショナル・レビュー』 (*National Review*) に掲載された。また1862年に結成された中産階級女子移民協会は、ガヴァネスの海外進出を目的として、彼女達を北アメリカやオーストラリアに送り出している (川本 82)。だが、このような植民地への移住計画は流刑を想起させるものであり、また当時のもう一つの大きな社会問題であった「墮ちた女」 (“fallen women”) の問題の解決策として講じたカナダやアメリカへの移住計画と同一のパターンであるため、あたかも「余った女」と「墮ちた女」が社会のはみ出し者として同じ扱いを受けていたかのような側面を呈する。Janet Murray は、当時結婚しない女性は「異常」(48) と思われ「侮辱と憐れみを交互に」(48) 受けていたと述べ、風刺雑誌の『パンチ』 (*Punch*) でも「余った女」は格好の揶揄の対象であった。結婚して「家庭の天使」となれなかった女性達がこのような不当な扱いを受けたのは、「墮ちた女」と同様にドメスティック・イデオロギーに反する者と見なされていたからではないだろうか。

ところで「余った女」が増えたのは、果たして男女の数のアンバランスなどの物理的要素だけが原因であったのか。Banks らはこうしたアンバランスの要因には「(一) 男女の死亡率の相違、(二) 海外移住に関する両性間の相違、(三) 上流および中流階級男性の晩婚の傾向」(川本 15) が関係すると捉えていたようだが、このうちの男性の晩婚化について注目したい。David Thomas の調査によれば、1800 年から 1849 年生まれの上流および中産階級の男性の初婚年齢は約 30, 8 歳で、1850 年から 1874 年生まれは約 31.9 歳と確かに晩婚傾向であったことがわかる (100)。度会は、男性達が適齢期に結婚しなかった理由に経済力が関係することを述べながらも、「令嬢たちの浮ついた高望みは当時のフェミニスト、保守派の両陣営から批判されていた」(90-91) と、一部の女性達の上昇志向と安定したリスペクダブルな生活への強い期待が、男性達が結婚の決断に慎重になるきっかけになっていたことを指摘する。上流および中産階級の男性は、家柄や経済力のバランスを取るために同じ位の階級の女性と結婚するのが一般的であったが、相手の女性の望む生活水準を保証できるか否かという問題は、男性達に結婚を躊躇させた要因として十分に考えられるものである。一方、女性達が理想的なレディの身分を追い求めるほどにそれが足かせとなり結婚が遠のくという構図は、簡潔に言えば、男性に何もかも依存して暮らすという従来どおりの「家庭の天使」を理想とする女性の生き方の限界を示している。

こうした未婚女性の増加に伴い、「家庭の天使」とは正反対の性質を持つ「男勝りの女」(“Strong-Minded Women”) が現れる。彼女達は、良妻賢母となり家父長に従いその庇護を受けて生活するという女性だけを家庭に縛り付ける考えに疑問を抱き、女性の活躍の場を家庭の外に広げて、男性と対等の権利を求めた女性達を指す。「男勝りの女」は 1850 年頃から『パンチ』にも度々取り上げられたが、彼女達が積極的に男性の領域に踏み込み、声高に女性の権利を主張した成果が、のちの参政権をはじめとする様々な女性の社会権の獲得につながっていく。ナイチンゲールは、家庭内で良き

妻・良き母を演ずるような生活を厭い、クリミア戦争における看護の仕事に使命感を持って従事し、当時は下賤なイメージであった看護婦の印象を見事に覆す。彼女は『北と南』のマーガレットのモデルと言われている。⁶

また、ナイチンゲールの功績を讃えて女性初の勲章を授けたヴィクトリア女王自身も、Elizabeth Langland が “Victoria was the most prominent working woman of her day” (66) と述べるように、女性君主として大英帝国を治めた「男勝りの女」である。前述のように、女王が自らのイメージを「家庭の天使」になぞらえたのは、彼女の支持層である中産階級に対する影響力を強めようとした意図がある。ヴィクトリア女王の女性像は、いわば「家庭の天使」と「男勝りの女」という対極にある二つの性質を融合させたものと言える。

このように、婚姻事情の変化や「余った女」の問題、そして「男勝りの女」の登場により、特に 19 世紀中葉の上流および中産階級の女性の生き方には大きな変化があった。それは女性達にとって、従来の階級やジェンダーに縛られた生活からの解放につながる一方、レディの特権であった男性による庇護や有閑生活の放棄を意味している。すなわち、女性達が時代の変革期に求められたのは、理想の女性像である「家庭の天使」や“レディらしさ”からの脱却であったと言えるのではないだろうか。

II ヒロインの性質の分析

『北と南』の主人公のマーガレットは、レディの生まれでありながらも、レディらしくない女性である。結婚はおろか恋愛にも無関心な彼女は、従姉妹のイーディス (Edith) の義弟である弁護士のリノックス (Henry Lennox) のプロポーズに驚き、それを断る。その後、移り住んだ工業都市のミルトン (Milton) で彼女は成り上がりの工場主のソーントンと親しくなるが、彼の告白も拒絶し、誤解から彼に思わせぶりで軽い女だと思われ、二人の交流は途絶えていく。両親の死後、彼女はロンドン (London) に戻り、一度ソーントンと離ればなれになる。父親の親友であり、彼女の

名付け親でもあるミスター・ベル (Mr. Bell) の遺産を相続した彼女は、周りの薦めるレノックスではなく、工場の再建を試みようとしているソントンと再会して結ばれる。Elisabeth Jay は『北と南』を、ヒロインが宗教的に高潔に生きることを模索する教養小説という位置づけをしているが (xx)、Patsy Stoneman が指摘するように、マーガレットは未熟なヒロインではなく、初めから強い精神力を持つ女性として描かれている (84)。物語の結末で、彼女が独り身のままとはならず愛する男性と結ばれるのは、彼女の更なる成長に対する報いと考えられるが、その相手は階級も地位も彼女にふさわしいと考えられるレノックスではなく、破産して一文無しとなった工場主のソントンであるのはなぜか。ここでは、マーガレットの性質の分析と彼女の精神的成長のプロセスを追いながら、ヒロインの結婚の表象を考察する。上流および中産階級の女性に求められていたレディらしさも、「家庭の天使」に求められる従順さも持たない男勝りの彼女が、「余った女」とはならず工場主の妻となることの意義を考えてみたい。

マーガレットの年齢は 18 歳であり (5)、当時の女性の結婚適齢期に入っただくらいと考えられる。彼女の母親は准男爵の娘であるが、父親は英国国教会 (the Church of England) の牧師であるため、彼女の階級は中産階級である。長男のフレデリック (Frederick) が海軍に入って以来、ミスター・ヘイル (Mr. Hale) の年収 170 ポンドのうち 70 ポンドを彼に送金しており、ヘイル夫妻は年収 100 ポンドで暮らしている (40)。これは当時のガヴァネスの年収が良くても 100 ポンドであることから、経済状況から言えば彼らの生活は下層中産階級並みである。だが、レディの身分を保つ母親と同じようにマーガレットも勤労することはなく、ガヴァネスとして自活することはない。もし彼女が生涯未婚となれば、年収 100 ポンドで父親が娘を養い続けることは難しく、⁷ たとえ彼女が身分相応のジェントルマンと結婚することになっても、ヘイル家では十分な持参金を用意できない。ヘルストン (Helstone) で彼女の結婚相手の候補と考えられそうな人物は貿易商のゴーマン (Gorman) 家の若者だが、階級や職業で差別をするふしのある彼

女は“*I don't like shabby people*” (18) と侮蔑を露わにする。マーガレットの階級意識の強さやヘイル家の経済事情を考えると、彼女は上流および中産階級のジェントルマンが結婚相手に選びたいと思える女性ではなく、かといって彼女が自分より下の身分の男性を受け入れる可能性は低い。従ってI章で言及したように、彼女は Banks の言う“困った立場”に置かれる「余った女」となることが危惧される。

次にマーガレットの容姿や性格を分析すると、彼女は顔立ちの良い両親と比べて美人ではないが (15)、その顔つきは“*If the look on her face was, in general, too dignified and reserved for one so young*” (15) と堂々とした落ち着きのある大人の女性として描かれる。彼女には男性の目を引く性的魅力もあり、ヘイル家のお茶会での彼女のプレスレットを付けた腕や美しい手の優雅な動きはソートンを魅了する (91)。彼女は衣装や社交パーティなどの年頃の女性が興味を引くものには関心がなく、レディの嗜みであるピアノも弾くことができない。だが、ダンテの『神曲』 (*La Divina Commedia*, 1307-21) を読むなど教養深く (23)、レノックスとの軽快な会話を楽しむ様子からも、知的で口が達者な印象が強い。このような彼女の性質は、一言でいうならば“*Not confined to the stereotype of 'the angel in the house'*” (Matsuoka 213) であり、また従順ではなく男勝りな性格である。また Robin B. Colby が“*Throughout the novel, Margaret is played off against Edith, who embodies the Victorian norm for femininity*” (48) と述べるように、従姉妹同士でほぼ同い年のマーガレットとイーディスは対照的な女性像をなす。マーガレットとは異なり、イーディスは早々に地位も収入も申し分のないキャプテン・レノックス (Captain Lennox) と相思相愛で結婚し、子供も授かって幸せに暮らす。彼女の性格は“*a spoiled child, she was too careless and idle to have a very strong will of her own*” (2) と書かれており、幼稚で怠惰で依存体質な彼女はなるべくして「家庭の天使」となった女性といえる。一方、マーガレットには男性の庇護欲をそそるような弱さはなく、そればかりか“*tall, finely made figure*” (6) や“*the round, mas-*

sive, upturned chin” (70) などの描写からは、彼女の身体の一部に男性的な特徴があらわれていることがわかる。容易に「家庭の天使」に分類できるイーディスとは違い、マーガレットは聡明で大人びた印象があり、女性の性的魅力がありながらも、心身共に男性的な部分も併せ持つような複雑な女性像で描かれている。

このように「余った女」となりそうな要素を持ち、「家庭の天使」らしさに乏しく男勝りなマーガレットが、最終的に工場主のソーントンと結婚するのはなぜだろうか。それには、彼女が先に述べた性質の他に、ブルジョア階級 (bourgeois) の女性としての特質を持っていることが考えられる。ソーントンは初対面のマーガレットに “empress” (69) や “queen” (89) という印象を抱くが、このように「女王」に例えられる彼女の姿は、ヴィクトリア女王を模倣として生きるブルジョア階級の女性のイメージに重なる。Langland が “That the queen of England became the central embodiment of middle-class familial values held great significance for the representation and role of bourgeois women” (64) と述べるように、貴族階級のレディでありながら政治を行うヴィクトリア女王の姿は、ブルジョア階級の女性の模範である。“the Sleeping Beauty” (7) に例えられるイーディスのように、受け身で自分の意志を持たず肉体労働は一切しないのがレディである。だが、「女王」に例えられるマーガレットはそうではなく、自らの意志に従って行動する。これは “Victorian culture linked womanliness with inactivity. In contrast, Gaskell recognized not only women’s potential for labor, but also their need for it” (Colby 12) との指摘があるように、レディは働いてはならないという考えに対して柔軟な姿勢を示し、女性が働くことについて肯定的に捉えるギヤスケルの考えが反映されたものと考えられる。⁸ マーガレットは家族や他人のために自己犠牲を厭わずに率先して動くことができるが、これは Jay が “Margaret’s long training for the role of companion: from early childhood she has learned to place her own happiness second to that of others” (ix) と指摘するように、皮肉にもレディとしての振る舞いを

身に付けるために滞在していた叔母の家で体得したものである。マーガレットは、わが身の危険を顧みずに他の工場主の元にストライキの動きを知らせに出向く勇猛なミセス・ソーントン (Mrs. Thornton) のように、スト破りの労働者達の襲撃からソーントンを守る。このように、准男爵家の血を引くレディでありながらもブルジョアの女性の特質を持つマーガレットの特異な性質は、彼女が「従順に家庭に納まる『家庭の天使』とは異なった、当時にしては新しい面を持った女性」(足立 244-45) であるという評価を裏付けるものであり、この特質は弁護士のレノックスではなく工場経営者のソーントンの妻となった場合に生かすことのできるものである。ソーントン主催のパーティで、マーガレットは牧師の娘ではなく「ミルトンのレディ」と認識されており(195)、優雅であるが堂々とした彼女の雰囲気は地元の工場主夫妻からの評判もよく、彼女はソーントンの妻に相応しいと考えられる。

III ヒロインの成長と結末

マーガレットが最終的にソーントンとの真の愛による結婚に行きつくために、彼女の更なる成長を促す課題がいくつかある。それは階級や職業の差別と偏見をなくし、レディであることへの強い自負を捨て、正義感と倫理観に基づく人間らしい行動をとることである。

『北と南』には様々な夫婦が登場するが、作者は一貫して相手の地位や収入ではなく愛による結婚の大切さを説く。上流および中産階級の子女は、親が選んだ収入や家柄が合う相手と結婚するのが普通であった。だが、物語の冒頭で年の離れた亡きジェネラル・ショウ (General Shaw) との結婚を後悔するミセス・ショウ (Mrs. Shaw) の姿は、肩書や経済力を重視した愛のない結婚では女性には幸せになれないというメッセージを送る。一方、打算的な妹とは異なり、ミセス・ヘイル (Mrs. Hale) は肩書や収入よりもミスター・ヘイルの人柄に惹かれて結婚する。だが良家出身の彼女は階級意識が強く、田舎の牧師夫人の身分を嫌がり家にこもって不満ばかり言う

(16-17)。彼女がマーガレットにレディとして生きることを望んでいたかどうかは不明だが、マーガレットは9歳から10年間もロンドンのショウ家に預けられており、その動機は“to share the home, the play, and the lessons of her cousin Edith” (5) と書かれている。このように、イーディスと一緒にレディの教育を受けさせるために少女のマーガレットを妹に託す行為には、ミセス・ヘイルのレディに対する執着が表れている。病に倒れたミセス・ヘイルは、度々見舞いに訪れるソーントンの優しさに触れるうちに彼の身分に対する偏見を捨て、彼に偏見を持つてはいけないとマーガレットを諭す(255)。そして彼女は死ぬ前に、妹のミセス・ショウにではなく、ソーントンの母親のミセス・ソーントンにマーガレットの母親代わりの役目を引き継がせる(286)。ミセス・ヘイルはマーガレットの反面教師であり、その階級意識の強さは娘であるマーガレットにも受け継がれている。だが、かつてミセス・ヘイルが情熱的に恋に落ち、階級も肩書も捨ててミスター・ヘイルと結婚したように、マーガレットも差別や偏見を捨て、レディであることに対する執着を徐々に手放すことで、ソーントンとの結婚に近づく。

マーガレットが格下のソーントンと結婚するためには、階級や職業の差別と偏見を取り払いレディの肩書を捨てなくてはならないが、そもそも「レディ」自体が上流および中産階級の女性達の呼び名で女性の社会的身分・肩書を表すものであり、これは階級やジェンダーのイデオロギーに女性達を縛りつける言葉でもある。マーガレットは、ミルトンで中年の職工のヒギンズ(Higgins)とその娘でマーガレットとほぼ同い年のベッシー(Bessy)と出会う。彼らのような身分の異なる「彼女の新しい友達」(84)との交流は、彼女の持つ階級意識の強さを和らげるのに一役買っており、その後、工場主になるまでのソーントンの青年期の苦労話を聞いた彼女は、“his statement of having been a shop-boy was the thing I liked best of all” (100) と、商人への差別的な考えを改める発言をしてミセス・ヘイルを驚かせる。また、マーガレット自身がそれを“a trial” (80) と感じるように、彼女

はロンドンにいた時とは異なり、ミルトンではシャペロン (chaperon) を連れずに一人で外出し、町で自ら日用品を購入するようになる。彼女はミルトンのパーティで、「ジェントルマンらしさ」(“gentlemanly”)と「男らしさ」(“manly”)の定義の違いについてソートンと議論を交わしているが(194)、ここでのソートンの考えから、彼はマーガレットを「レディ」としてではなく一人の「女性」として受け入れることができる男性であることがわかる。これは、地位や肩書を重視する「ジェントルマン」(“gentleman”)のレノックスがヘルストンを訪れた際に、准男爵家の縁戚であるはずのヘイル家が、明らかに小さくみすぼらしい家に住んでいると落胆するのは対照的である(23)。イーディスは、保養地から戻って活力を取り戻したマーガレットが自分の意志に従って生きる男勝りとなるのを恐れ(497)、彼女をレノックスと結婚させようと画策する。だが Felicia Bonaparte が “What Gaskell wants is to find a way for Margaret to live her life as a male” (170) と述べるように、作者は男性と同じようにマーガレット自身に自分の生き方も伴侶も決めさせる。そしてマーガレットは、彼女を「レディ」に縛り付けようとするイーディスを振り切り、自らの意志でソートンを結婚相手に選ぶ。

マーガレットが人として更に成長するために必要なのは、正義と倫理に基づいた行動を取ることである。例えばミスター・ヘイルの英国国教会に対する疑念や、フレデリックの反乱に見られるように、ギヤスケルは本作全体を通して、不当な権力に臆せず立ち向かい、弱者を守るために自己を犠牲にできるか否かという問題を投げかけ、登場人物の正義感や倫理観を試している。従って、マーガレットは地位を捨てて信念を貫く父親や、仲間のために暴君の上官に反抗した兄のように、「レディ」としての自分の立場を顧みず、労働者の襲撃からソートンを守り、また不当な嫌疑をかけられ逃亡中の身であるフレデリックを無事に国外に逃がさなくてはならない。Stoneman が “the humanly ethical action is sexually disgraceful” (85) と述べるように、それらの成功と引き換えに彼女が犠牲にするのは「女性の

品性」(372)であり、作者が彼女の人間性を試すために課した試練である。マーガレットは、労働者の襲撃に驚いて気絶するファニー (Fanny) とは異なり (208)、怒り狂った暴徒達の投石からソーントンを守るために彼の首に両腕を回して抱きつき、投石を額に受けて血を流して倒れる (212)。だがこの勇敢な行動も召使いとファニーには、彼女はソーントンに好意があり、公衆の面前で大胆にも抱擁したと捉えられ、彼女は屈辱を受けるが黙って耐える。また、彼女がフレデリックを夕暮れの人気のない駅に送り届ける所をソーントンに目撃され、二人を恋人と勘違いした彼に軽率な女だと疑われるが、逃亡中のフレデリックが捕まることを恐れた彼女は、兄を助けるために汚名を被る。さらにミセス・ソーントンが、マーガレットに軽率な振る舞いをしないようにと忠告に来るが、彼女はそれを無粋な勘繰りだと憤慨して相手にしない (377)。Shirley Foster が “Margaret represents a marked challenge to many accepted ideals of femininity” (149) と言うように、マーガレットは「レディ」としての体面を保つことよりも、「人」として弱者を守るために勇氣ある行動を起こすことができ、そのために勘違いや的外れな見方からの嘲笑や侮辱を受けることになっても、それに耐えて決して屈することはない。強い正義感から「人間らしい倫理的な行動」(Stoneman 85) を取ろうとし続ける彼女は、いわば孤高のアマゾネスである。彼女は、労働者達の苦しみや貧困にあえぐ窮状を救うべくソーントンに働きかけ、また工場主と労働者の仲介者として、最終的に彼らの抗争を両者の和解という平和的な形で終結させる。そして、この仲介者としての彼女の働きは、見事にブルジョアの女性の担う役割を果たしているのである。

Imitating Victoria's career, women's work was to be oriented to the good of human lives rather than to the goal of personal wealth. The labor of bourgeois women was understood as managerial rather than menial, rewarded by social harmony rather than remunerated with hard cash (Langland 66)

自分の立場を守ることよりも弱者を守り人間らしい行動を取るという彼女の姿に感化されたソーントンもまた、工場の破産の際に、労働者達の賃金を確保するために、自ら債務を負うことを選び、一文無しとなる。だが、イーディス主催のパーティで、工場の再建に意欲を燃やす彼の語る新しい工場の経営法は、主賓の議員のミスター・カルサーストの興味を引く。彼が階級差を乗り越えてマーガレットと結婚できるのは、Langland が “a man successful in trade might contract a marriage with a lady” (29) と指摘するように、彼がバイタリティに溢れる立身出世するタイプの男性であることも関係すると考えられる。ミスター・ベルの莫大な遺産と地所を引き継いだマーガレットは、裕福な女相続人となるが、ソーントンを支える未来を“自ら” 選び、工場再建の費用として遺産を差し出す。ミスター・ベルの遺産は、ソーントンの工場再建の融資とマーガレットの持参金を兼ねており、相思相愛の二人を陰ながら見守ってきた彼からの祝福を表す。物語の最後にマーガレットは自らの存在を「女」と言い表すことで (521)、「レディ」であることの呪縛から解放される。またソーントンとの結婚によって、彼女はドメスティック・イデオロギーからも解放されるのである。

結論

ギヤスケルはマーガレットの生き方を通して、中産階級の女性達に「家庭の天使」やレディとして生きることに縛られず、自立心を持ち自分の意志で未来を切り開くことの大切さを説いている一方、イーディスのように「家庭の天使」としての生き方に満足し、レディらしさを享受する女性の人生を否定してはいない。しかしながら、結婚しなくても、あるいはレディとしての身分を保って生きられなくても、それを社会が不幸だと決めつけるのは誤りであり、道徳や正義に反しない限り、女性達は自分の生き方も幸せも自分で決めて良いという作者のメッセージが『北と南』にはこめられているのではないか。ギヤスケルは『北と南』を通して女性達の多様な生き方を認めながら、「家庭の天使」の崇拜や“レディらしさ”のイデオロ

ギーから解放された女性達が活躍する未来への期待を描き出しているのである。

注

1 本作の前に、ギヤスケルは「余った女」を題材とした『クランフォード』(Cranford, 1851-53)を書いている。作者が子供時代を過ごしたナッツフォード(Knutford)を舞台のモデルにしながら、未婚女性達が牛耳る架空の小さな田舎町で起こる様々な出来事をユーモラスに描き出している。

2 Banks, Joseph A., and Olive. *Feminism and Family Planning in Victorian England*. Liverpool UP, 1964. を参照。

3 ギヤスケルの親しい友人であったブロンテは、自らのガヴァネスとして働いた経験を生かして、ガヴァネスを主人公とした『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847)を執筆している。

4 女性がガヴァネス以外の職業に就けるようになるのは、少なくとも1859年の婦人雇用促進協会の設立まで待たなければならなかった。

5 テイラーは、ギヤスケルの書いた『シャーロット・ブロンテの伝記』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857)にも登場する、ブロンテの女学校時代の親友。

6 木村は、姉のパーセノープ(Parthenope)もまたマーガレットのイメージモデルであるという見方を示す。木村正子「GaskellとNightingale姉妹——それぞれのヒロイズムと*North and South*」『創立30周年記念 比較で照らすギヤスケル文学』日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2018年、151-64頁。を参照。

7 ヘルストンのヘイル家には、マーガレットとフレデリックを除き、ヘイル夫妻と召使のディクソン(Dixon)の他、使用人のシャーロット(Charlotte)、サラ(Sarah)、料理人などがいる。

8 女性の仕事に対する作者の考えの詳細については、*The Letters of Mrs Gaskell*. Edited by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, Mandolin-Manchester UP, 1997, pp. 107. を参照。

引用文献

Auerbach, Nina. *Woman and the Demon: The Life of a Victorian Myth*. Harvard UP, 1982.

Banks, J. A. *Prosperity and Parenthood: A Study of Family Planning among the Victorian Middle Classes*. Routledge, 1954.

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.

Colby, Robin B. "Some Appointed Work to Do": *Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell*. Greenwood Press, 1995.

Foster, Shirley. *Victorian Women's Fiction: Marriage, Freedom, and the Individual*.

- Croom Helm, 1985.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. 1906, Knutsford ed. *The Works of Mrs. Gaskell*, edited by A. W. Ward, vol. 4, AMS Press, 1972.
- Jay, Elisabeth. Introduction. *North and South*. 2005. By Elizabeth Gaskell, edited by Jay Elisabeth. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 7, Routledge, 2016, pp. ix–xxiii.
- Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Cornell UP, 1995.
- Matsuoka, Mitsuharu. “‘There’s Good and Bad in Everything’: The Status Quo as a Necessary Evil in *North and South*.” *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*, edited by Mitsuharu Matsuoka, Osaka Kyoiku Toshō, 2015, pp. 201–16.
- Murray, Janet. *Strong-Minded Women: And Other Lost Voices from Nineteenth-Century England*. Pantheon Books, 1982.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. 1987. 2nd ed., Manchester UP, 2006.
- Thomas, David. “The Social Origins of Marriage Partners of the British Peerage in the Eighteenth and Nineteenth Centuries.” *Population Studies*, vol. 26, no. 1, Mar. 1972, pp. 99–111. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/2172802.
- 足立万寿子 『『北と南』に見られる女性問題——ヒロインの結婚への決意を通して』 『生誕二〇〇年記念 エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』 日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2010年、241–52頁。
- 川本静子 『ガヴァネス (女家庭教師)』、中央公論社、1994年。
- 度会好一 『ヴィクトリア朝の性と結婚』、中央公論社、1997年。

The Marriage of a Strong-Minded Lady:

The Transformation of Women's Way of Life and the Release of Them
from Domestic Ideology as Depicted in *North and South*

Ruri Yajima

The lifestyles of upper- and middle-class women and their marital status changed in the mid-nineteenth century. The popularity of *The Angel in the House* (1854–62) written by Coventry Patmore (1823–96) shows that the public, especially the middle class, admired women who epitomized the good wife and nurturing mother. Nevertheless, the 1851 census revealed there are many spinsters, who were called “redundant” women. They were generally supported by their fathers or brothers. If women wanted to support themselves, they had no choice but to become governesses. The so-called Strong-Minded Women emerged in the 1850s. They challenged the Victorian gender ideology that bound women to the domestic sphere and demanded equal gender rights for woman.

Margaret Hale, the protagonist in *North and South* (1854) written by Elizabeth Gaskell (1810–1865), is a middle-class lady of a marriageable age. Unlike her cousin Edith, she does not fit the stereotype of the “angel in the house.” She is not obedient and idle; instead, she is indomitable and vital. Thus, she is more of a strong-minded woman than an “angel in the house.” Henry Lennox, a barrister in London, and John Thornton, a mill owner in Milton, both want to marry Margaret. She finally marries Thornton even though he had been reduced to penury with his factory becoming bankrupt. In those days, a young woman from a respectable family usually married a man equal to her in class and social standing. However, Margaret chooses to marry the bourgeois Thornton, rather than Lennox, a professional class gentleman.

Queen Victoria was also a strong-minded woman, although she skilfully concealed her strong-willed spirit beneath the image of the angel in the house as part of her political strategy. She was not only an aristocratic lady but also

the monarch. Balancing the roles of “angel” and manager, she became the centre of an “aristocratic bourgeoisie” and upheld the image of a model bourgeois woman. The words “queen” or “empress” being used to describe Margaret’s personality proves that she encompasses the personality of a bourgeois woman, so it is believed that it is suitable for her to marry Thornton. However, Margaret also embodies a sense of class distinction and takes pride in being a lady. If she could not change her mind and become free of her prejudice, she would not be able to marry Thornton and might become a redundant woman, like many of her contemporaries.

North and South is a bildungsroman, and the major theme of this novel is to resist against authority and fight for the cause of justice to support the weak self-sacrificingly. Margaret faces a test of her ethics and sense of justice through the course of the story. This paper will contemplate the representation of the marriage of Margaret, a strong-minded lady, and explain the change in the institution of matrimony, the problem of surplus womanhood, and the protagonist’s intellectual growth and her inherent personality as a bourgeois woman.